HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「これか·あれか」に於ける美的段階の諸相
Author(s)	渡部, 光男
Citation	基督教学, 4, 54-57
Issue Date	1969-07-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46248
Type	journal article
File Information	4_54-57.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

『これか・あれか』に於ける美的段階の諸相

渡部光男

『これか・あれか』は厳密には三部より構成されている。第一部はAと呼ばれる青年のディアプサルマタと諸論文、及び作者がAである可能性も持たされているヨハネスの日記であり、第二部は裁判官ウィルヘルムと言う倫理的生活を送る人物BのAに対する論文形式の書簡であり、第三部はユランの荒野のある教区牧師からのBへの書簡であるウルティマティウムである。「これか・あれか」と言う題は第一部を自己の実存として選びとるか、それとも第二部かと言うよりはむしろ、著作の背後に秘められているのは美的実存か宗教的実存かであることを示している。中後期に確立されるキェルケゴールの実存の段階説もしくは領域説が、七つの区分、つまり、美的段階、イロニー、倫理的段階、フモール、宗教性A、宗教性B、宗教性C、を持っているのに対し、『これか・あれか』に於いてはその三つまでが規定を受けていると言い得る。

ここではまず第一部の八つの部分を整理し、美的生存がan sichには如何なるものかを示した上で、第二部の「均衡」を用いて、倫理的段階から美的段階の諸相を分析し、整理し、その細分段階を提示したい。それはキェルケゴールの初期思想に於ける段階説の発生状況の整理であり、「均衡」を手がかりに、美的段階及び疑似美的段階の十六の細分段階もしくは相への分割可能なことの提示であり、第一部そのものが、ロマン主義の美学観を背景に持つことの提示である。同時にここには宗教的段階への上昇発展の運動と下次の美的段階を原理的に支配

する下降運動との二重性を示すことも意図される。

周知の通り美的段階もしくは領域はキェルケゴールの実存の段階説に於ける第一の直接の段階であり、ここでは人間は実存の真の意味と真剣さとを理解せず、実存の課題をも顧慮せず、空想に走り、単なる可能性の中に生を変化させ、瞬間的断絶的に生きる状況である。『後書』に於いては美的段階はいまだ実存を獲得できない実存可能性、倫理的に仕上げられる必要のある憂愁として規定される。更に宗教性より見た場合、『これか・あれか』第一部は隠蔽であり、第二部は開示である。こうした美的段階としてキェルケゴールが弾劾しようとする具体的なものは、第一にパピアからも裏付けられる様に、一八三五年から三八年にかけての「大地震」以後の自己の生存であり、第二にドイツ・ロマン派及びデンマーク・ロマン派の思想、特にFr・シュレーゲルのロマン的イロニーの思想である。第一部を概観すれば、(1)「ディアプサルマタ」は美的生活の無目的性、倦怠、嘲笑、現実軽視、無頼などをテーマとする美的生活の基本的気分を示している。特に憂愁がここで示される。(2)「直接的エロース的段階」に於いては、単なる感性の段階での、直接性に於ける美的生活の諸相が、感性的天才としてのドン・ジュアンの分析を通して描かれる。(3)「悲劇論」及び(4)「影絵」に於いては美的生活の底流に流れる絶望感を伴った悲劇的感情と美的悲哀としての直接的悲哀と反省的悲哀とが示される。(5)「最も不幸な者」に於いては美的生活の持つ皮肉な現実把握、美的な絶望、美的生活の矛盾性と無意味さとが、ロマン主義の暗い側面を示しながら、悲哀に対する極度の感傷の態度の中に描き出される。(6)「初恋」書評に於いては、思想の可能性の中をかけめぐるのみで、決して実存しないAの美的生活の気ままな空想と、その浅薄な欺瞞的性格が示され、(7)「輪作」に於いては美的生活そのものの核心としての原理である輪作が三つの次元から論じられる。(8)「誘惑者の日記」に於いては反省的誘惑者の概念とその反省的美的享楽とが示される。

この様な第一部の様相を倫理的段階から整理し、上昇・下降の運動を指摘するのが「均衡」である。美的段階には素朴な無反省的な直接性から、反省を伴った深刻

な絶望に至るまで、様々な細分段階もしくは相がある。なお又本来は美的段階に所属しないが、かと言って倫理的段階にも到達し得ない、いわば疑似美的段階とも言うべきものの細分段階もある。更にキェルケゴールの段階説に於いては、もちろん美的段階をもつらぬいて、初期には倫理・宗教的なものに、後期には宗教性Bに向って開示を求める、いわば上昇する運動と、挫折による絶望と、上昇に伴い低次の諸段階を原理的に統御する下降運動と言う三つのモメントが常に認められる。さしあたり美的段階に於いては、上昇運動は倫理・宗教的なものに向い、下降運動は美的段階に於けるより低次の細分段階に向っている。美的段階に細分段階もしくは相が存在することは、ウィルヘルム自身の言葉、「それでも若干の段階はやはり簡単にのべておきたい」(SVII 193) とか、「美的に生きる者は極めて様々の段階から……」(SVII 196) などから容易に裏付けられる。上昇・下降の二重運動については、例えば、「人格は自己自身を選ぶことによって、自己自身を倫理的に、美的なものを絶対的に排除する」(上昇)、しかし「けれども人間は自己自身を選ぶことによって別の存在となるのではなく、彼自身となるのであるから、美的なものの全体は相対的に戻ってくる」(下降) のである。美的段階は全ゆる可能性の権化であって、その中に破滅の可能性と救済の可能性とを同時に包含しているのである。

美的段階の第一の相は「素朴な無反省的な直接性」であり、ここでは人格は精神的にではなく、肉体的に直接的に規定されている。美的段階の第二の相は「享楽の前提を外部に求める人生観」である。第三の相は享楽の前提は個人自身にあるが、個人自身によって指定されたものではなく、人格はここでは一般に才能として規定される。これら三つの相はいわば低次の美的段階であって、人生の基盤におかれているものは単純なものである。『不安の概念』に於いては「無精神性」として規定され、これらの状態に於ける上昇の契機である不安は潜在的に存在している。『死に至る病』に於いては何の反省を持たない直接的人間の状態として規定されている。美的段階の第四の相は多様なものを人生の基盤とし、有限な反省を伴う人生観である。ここでは人生は享楽すべきもの

として、欲望のおもむくままに生きることとして宣言される。欲望の対象は多様であり、典型としてネロが示される。美的段階の第五の相は「自己享楽」である。享楽の対象を自己自身とし、享楽の中で自己自身を反省的に享楽する。ここには程度の高い反省が伴う。

こうした細分段階に運動が加わる。美的段階の第六の相は、これら諸段階に不可欠の運動が加わり、挫折としての絶望、つまり絶望Aに直面する段階である。美的段階の第七の相は、絶望そのものである。これは絶望Aと異なり、何か個物に対する絶望ではなく、思想上の絶望であり、絶望Bである。これは「最も不幸な者」にも示される様に、この段階全体が倫理・宗教的なものに向う上昇の契機であると同時に転落の契機でもある。美的段階の第八の相は「詩人の実存」である。それは詩作を通じて自己を獲得した詩人であり、それ自体が不幸な生存である。これはロマン主義全体に対する発言である。第九の相は美的段階と倫理的段階との境界領域であるイロニーである。美的段階と倫理的段階との接触としての第十の相は「選択」である。倫理的段階への飛躍の契機として選択は絶対的であり、絶望の中で絶対的なものを選択する。この様な移行の過程に於いて示されるものが、第十一の相である「後悔」である。これはこの自己獲得の行為をあらわす表現である。この様な絶望・選択・後悔の状況にあって、一歩踏みちがえれば落込む恐ろしい邪路があって、それが疑似美的段階の一つである「悪魔的なもの」であり、第十二の相である。自己が絶対的に選択せずに、自己の絶望を有限な意味で望み、自己の最も内的な本質が絶望の中で突破にまで至らないとき、それは閉じこもり、硬化するのである。

美的段階に共通する美的真剣さがあり、それが第十三の相である。同様に美的段階に共通する気分性があり、第十四の相である。第十五の相は疑似美的段階の一つとして「ナルシスの段階」である。第十六の相は疑似美的段階の一つとして「悲哀に沈める者」である。こうして「均衡」に於いては十六の相のもとに美的階段が示され、美的段階の細分段階が八、美的段階と倫理的段階の移行に認められる相が六、美的段階に共通に認められる相が二である。